

【事例紹介】

## 目白大学外国語学部韓国語学科の留学制度

### －「交換留学」を中心に－

Study Abroad Programs at Mejiro University's Faculty of Foreign Language Studies, Department of Korean Language Studies: With a Focus on "Student Exchange"

目白大学外国語学部韓国語学科長 小林 寛

KOBAYASHI Hiroshi

(Chairperson, Faculty of Foreign Language Studies, Department of Korean Language Studies,

Mejiro University)

キーワード：留学政策、大韓民国、全員交換留学、D.D.、海外の大学との交流

#### はじめに

目白大学は平成6年に開学して以来、大韓民国の大学校と積極的な「交換留学」を推進し、現在、本学と交換留学の協定を結ぶ大韓民国の協定校は18大学校20キャンパスを数える。「韓国語学科」の入学定員は60名、1年次から4年次まで実質280名近い学科在籍学生が、卒業時には交換留学の経験をもって学位記を手にする。学生数では日本の韓国語に関する留学教育を代表する規模になっている。2年次学生は原則全員が協定校のひとつに1年間以上、交換留学する。私費留学ではない、学費が減免される公費留学の性質を持つ交換留学制度では、基本的には同数の韓国人学生が協定校から交換で来学する。学生にとっては協定校からの韓国の留学生在が身近にいて、最新の韓国の情報に接することができる利点がある。在学中の2年間以上の留学によって定められた単位を取得して、卒業時に本学と協定校の両方の学位を取得する「二重学位(D.D.)制度」により留学する学生も毎年20名近くいる。交換留学を前提に1年次には15名程度から成る4つの「能力別韓国語学習クラス」をおき、韓国語会話、韓国語文法、韓国語聴解、韓国語作文の4科目7コマの韓国語基礎科目を学ぶ。この科目群は非常勤も含め韓国生まれ韓国育ちの「韓国語ネイティブスピーカーの教員」で構成される。

韓国語に特化して学ぶ280名規模の韓国語学科、学科学生全員1年間以上の交換留学、2年間交換

留学できる留学枠が20名あるD.D.制度、能力別少人数韓国語クラス、韓国語基礎科目担当教員全員が韓国語ネイティブスピーカーという諸点を、本学韓国語学科の特徴として挙げるができる。

## 1 外国語学部設置と留学にかかわる取り組み

目白大学の設置者「学校法人目白学園」の94年間の国際交流は、大正12(1923)年故佐藤重遠によって創立された「研心学園<sup>1</sup>」創設当初から外国語教育と国際交流に彩られる。同創立者は教育に関する国境を超えた理念を掲げ、「わが学園に来るものの国籍は問わない<sup>2</sup>」と述べ、在学生の国籍を問わない教育を推進した。こうした基層があって、平成6(1994)年に、本学園に、四年制大学として「目白大学」が創設され、岩槻キャンパスに「人文学部」の2学科「地域文化学科」「言語文化学科」がおかれ、科目としての韓国語は大学設置初年度から履修することができた<sup>3</sup>。本学「教育の理念」「教育目的」に則って、国際交流に基づく「教育の特色ある先進的取り組み」として「(海外)現地入試」「外国語教育の充実」「臨地研修」「招待留学」「交換留学」「単位互換制度」「セメスター制度」が整備された。

平成17(2005)年新宿キャンパスに「外国語学部」が設置され「英米語学科」「アジア語学科(中国語専攻・韓国語専攻・日本語専攻)」が開設され、外国語学部は所属学生を積極的に留学させる教育制度をとる。人文学部以来蓄積された組織としての留学実務の経験を活かし「全員留学」「全員交換留学」「二重学位(D.D.)制度」が強化された。さらに、平成20(2008)年、外国語学部のアジア語学科が「中国語学科」「韓国語学科」「日本語学科」に改組され、平成24(2012)年には日本語学科が「日本語・日本語教育学科」に改組される。また、2017年現在大学院には7研究科12専攻を数えるなか、特に言語文化研究科においては、「交換留学」制度を大学院にも適用し、本学大学院学生の韓国協定校大学院への派遣、韓国・中国の協定校大学院学生の本学大学院への受け入れを複数、実現している。

## 2 本学の「教育理念」に即した交換留学

本学の「建学の精神」には、迷妄を取り除いて真理に目覚める「開目」による、仏陀の願いに育まれ我が国に成立する精神「主・師・親」が掲げられ、創立者はここに現代的意味を拡充して、それぞれ「国家社会への献身的態度」「真理探究の熱意」「人間尊重の精神」を意味して提示した<sup>4</sup>。この建学の精神に基づいて本学の「教育理念」に、「主体的人間形成による自我確立」「育てて送り出す大学」「座学から活学へ」が掲げられ、「教育目的」に「建学の精神を基本的資質として学生・生徒に身に着けさせる」ことを挙げている。ここから学生の自立的行動と実践的学習とを重んじて「留学」が重視

<sup>1</sup> 本学園設置の最初の教育機関に当たる。

<sup>2</sup> 『目白学園八十年史』目白学園、平成17(2005)年、375頁を参照されたい。

<sup>3</sup> 人文学部設置当初は科目名を「コリア語」としていた。

<sup>4</sup> より具体的には『目白大学人文学部設置文書』平成5(1993)年を参照されたい。

される<sup>5</sup>。海外研修をして、あるいは留学して「座学から活学へ」と、行動的学習研究を進める。自ら計画的に体験的学習を計画実行して異文化体験を通じて「主体的人間形成による自我確立」を促し、海外留学の経験と知見とを有するよう学生を「育てて送り出す」ことが構想された。

本学では「招待留学<sup>6</sup>」「交換留学<sup>7</sup>」を人文学部の設置時点から実施し、英米語圏ではマラスピーナ大学との間において「招待留学」を設け、韓国語圏では韓瑞大学校、湖南大学校との間においてそれぞれ年に2名ずつの1年間以上の「交換留学」を実施してきた。現在では本学は海外50大学以上の大学との協定を有している<sup>8</sup>。

韓国語学科から交換留学で派遣される協定校は、おおむね提携順で、韓瑞大学校、湖南大学校、延世大学校、蔚山大学校、昌信大学校、高麗大学校、慶熙大学校、ソウル女子大学校、嘉泉大学校、東国大学校ソウル校、東国大学校慶州校、金剛大学校、培材大学校、韓国外国語大学校ソウル校、韓国外国語大学校龍仁校、江原大学校、済州大学校、釜山大学校、梨花女子大学校、南ソウル大学校の18大学校20キャンパスとなる。

### 3 交換留学を支える制度

本学では「交換留学」による学生交換を実施しながら、所属学生が4年間で卒業できるように「単位互換制度」を整えた。「単位互換」は本学で取得すべき科目の単位を、海外の大学で履修した科目の単位をもって互換するもので、学習内容と学習時間とが互換に値する科目であることを、各学科の専門科目担当者、教務委員会、教授会で審議して承認する。「単位互換制度」によって、通常の留学をした場合でも、本学学生は条件を満たすことで、4年間で学部を卒業できる。

平成10(1998)年からは、9月に新学期が始まる海外の教育制度に鑑み、海外協定校からの留学生が来学しやすく、また、本学学生が海外に留学しやすいように、春学期秋学期入学を可能とする、6か月を学期として単位を授与する「セメスター制度」を導入した。

また、交換留学に伴って、保護者によって組織される「後援会<sup>9</sup>」組織を本学は有している。留学情報を共有し学習を支援するとともに、留学生を受け入れて文化体験講座を実施するなど、保護者組織による国際交流行事が企画され、留学に関する情報交換や各種支援活動、国際交流のPR活動などの活

<sup>5</sup> 目白大学は平成6(1994)年、岩槻キャンパスに設置された。『目白大学人文学部設置文書』平成5(1993)年を参照されたい。人文学部は新宿キャンパスにおける平成17(2005)年の外国語学部設置、平成18(2006)年の人間社会学部地域社会学科の設置によって、発展的に改組され、国際交流にかかわる制度は全学的に適用されて維持されてきている。

<sup>6</sup> 主として英米語圏の大学で、本学から語学研修生を派遣する見返りに、学費無料の招待で1年間以上の留学が数名に認められる。

<sup>7</sup> 本学学生は本学に、協定校学生は協定校に学費を納めながら学生を交換することで留学先学費無料の留学を実現する制度を、本学では「交換留学」としている。JASSOの海外留学支援制度(協定派遣)の支援をたびたびいただくことができた。

<sup>8</sup> 『目白学園総合案内』2016年34頁を参照されたい。

<sup>9</sup> 「教育後援桐光会」といい、その中に「韓国語学科後援会」が位置づけられる。

動をする。

#### 4 国際色豊かな教員構成と韓国語クラス

大学設置当初から続く教員交流を基盤とし、本学外国語学部の外国籍教員のなかには協定校から移籍した教員もあり、休暇中に本国に戻る際に積極的に協定校視察、海外研修、海外講演、海外研究発表等に従事するなど、教員による国際交流を推進できる要因の一つにもなっている<sup>10</sup>。韓国語学科では韓国に生まれ育った教員が専門科目担当専任教員7名のうちの6名を占め、学科教員構成上の特徴をなす。学科学生全員交換留学を前提に、学生は韓国語を学ぶと同時に韓国の行動習慣を韓国語ネイティブスピーカーの教員から意識的無意識的に学び習慣化するという要請が内在する。留学前に韓国の文化的基層にある師弟関係の重要性を言語学習の場で体験的に理解させることを構想している。1年次の韓国語基礎科目のクラスをこうした教員が非常勤講師<sup>11</sup>とともに担当する。

交換留学を前提に、1年次の学生には韓国の大学で授業が受けられるように、韓国語運用能力を集中的に養成する。韓国語を学習するクラスは、おおむね15名ずつ「初級」2、「中級」1、「上級」1の、4つの能力別韓国語学習クラスに分けられる。入学時の韓国語プレイメントテストによってクラス分けが行われる。入学する年度の学生の韓国語能力によって、場合によっては例えば「中級」のクラスが2つになるなど、クラスのレベルや設置数が変わることもある。年度後半の秋学期開始時にはクラス替えも行われる。1週間に、90分の授業「韓国語会話」2コマ、「韓国語文法」2コマ、「韓国語聴解」2コマ、「韓国語作文」1コマ、計4科目7コマの韓国語基礎科目を学ぶ。

#### 5 留学生別科とチューター制度

平成9(1997)年には岩槻キャンパスに「留学生別科」が設置された<sup>12</sup>。新宿キャンパスでも平成14(2002)年、「国際教育交流センター」が設置され、「留学生別科日本・アジア専修課程(JASP)」が置かれ、設置当初、海外からの留学生に対して授業をすべて英語で行う1年制課程の教育が行われた。その後、「日本語教育センター」がおかれ、交換留学で来学する学生をはじめとする留学生に「留学生別科日本語専修課程(JALP)」によって、日本語による日本語教育も行われる。

外国語学部設置後の「交換留学」制度によって、基本的には派遣数と同数の留学生が本学キャンパスに在籍することから、本学は留学生との接触が多いキャンパスを実現している。人文学部以来、学生による「チューター制度」も整えられ、留学生の日本の学習生活を支援し同時に留学生を世話することで本学学生の国際感覚が養われる配慮がなされた。新宿キャンパスでは「next」という学生

<sup>10</sup> 韓国語学科では、協定校から移籍した教員が複数おり、また、現地入試によって本学に学び、本学所属となった教員の事例がある。

<sup>11</sup> 韓国語基礎クラスの非常勤講師5名も韓国語ネイティブスピーカーの教員で構成される。

<sup>12</sup> 現在は岩槻キャンパスには「留学生別科」は置かれていない。

チューター団体が国際交流センターの管轄のもとに組織され、来学した留学生の学習生活の手伝いをし、海外の学生チューター組織と相互に行き来して活動交流会を実施するなど、活発な学生交流を行っている。

## 6 臨地研修

教育理念に根差す国際交流に基づく留学教育として、「交換留学」とは別に、海外での学習を単位化する「臨地研修」がある。臨地研修には、フィールドワーク、インターンシップ、外国語教育実習、語学文化研修、私費留学をもその内容に含み、国内外の現地に臨んで学生が自主的に学習研究する。日本をはじめ世界各地の文化、世界の各言語の文化を学ぶ科目として、全学的に導入されている。韓国語学科では原則として韓国語圏における海外臨地研修のみ認める。海外における臨地研修については、本学所属教員が研修の安全を考慮しつつ、60時間2単位、120時間4単位の研修を基本として、海外研修を企画し設計して提示し、学生を指導・助言して専門教育としての単位を授与する<sup>13</sup>。

平成29(2017)年現在では海外で研修・留学する学生は短期・長期、私費・交換・招待にかかわらず、全員が「海外留学保険」に加入して渡航することが義務付けられており、安全についての学生の注意喚起が促され高等教育機関としての対策が図られる<sup>14</sup>。韓国語学科では、1年間以上の交換留学を行うことを前提に、1年次の夏期休暇中に「臨地研修」を申請し、韓国協定校の「韓国語語学文化研修」に参加し、同時に協定校を回って留学先を決めるために視察してくる学生も多い。

学生を海外に派遣するには、現今の情勢の変化を踏まえる必要があり、学生の留学の安全の確保をよりいっそう確実にすることが求められる。「保険制度」の充実、「安全教育」に一層の留意が求められるとともに、「緊急時の対応の諸策」が講じられねばならない。これは喫緊の課題として、国際交流の担当者間で重く認識されていて、担当者による諸討議や研修への参加が重ねられている。「危機管理」「異文化理解」「国際理解教育」などの将来の国際交流を見据えた授業科目の内容の充実を図るために、この面での研究の充実が図られている状況にある。

## 7 国際交流を支える本学各センターと事務局組織

こうした積極的な国際交流を支える本学組織として「国際交流センター」「日本語教育センター」がある。「国際交流センター」は海外の大学や研究機関との交流を推進し、海外で学びたいという学生の交換留学や海外語学研修に関する業務、語学教育プログラムや国際交流イベントの運営について役割を有し、かつ、JASSP(留学生別科日本・アジア専修課程)を通じて海外からの外国人留学生に対す

<sup>13</sup> 韓国語学科においては480時間16単位の臨地研修もおかれる。交換留学と、臨地研修とは別扱いになっている。

<sup>14</sup> 本学与保険会社との包括契約で維持されてきている。留学の派遣と受け入れについては本学国際交流センターが所管する。

る支援を行なっている。本学と協定をもつ海外協定校が多い分、海外協定大学からの訪問客・訪問団も多い。韓国全土の大学から選抜されて派遣されてくる韓国大学訪日研修団が毎年、本学を訪問して視察をし、学生交流をする場合なども含めて、国際交流センターが対応する。「日本語教育センター」は留学生の日本語教育を担当し、交換留学生をはじめとして日本語学習への熱意を持った世界のあらゆる学生にJALP(留学生別科日本語専修課程)、およびJALC(日本語日本文化研修)を提供する。事務組織は「学生部」のもとに「国際交流課」がおかれ、両センターの事務を管掌して本学国際交流を支えている。

## おわりに

本学の語学教育においては、体験を重んじた「教育理念」に基づく国際交流教育の充実が図られてきている。韓国語学科においては留学を手法とする現地語学文化教育を支える制度として、留学先学費を無料とする「交換留学制度」の充実があり、その上に「D.D.制度」も導入されている。留学をしても4年間で卒業できるようにする「単位互換制度」や、留学生を派遣し受け入れやすくする「 Semester制度」「保険制度」が整えられている。国際交流教育を導入する場合は当然のことながら、受け入れる留学生の留学生活を支える「チューター制度」や寮の確保、留学生別科、留学支援科目、留学生への就職支援の機会も設けられる。また、保護者が「後援会」を組織し本学の国際交流を支え、学科教育を支えていることは特筆できる。